

現代南アジアにおけるイスラーム聖者崇敬とその批判に関する歴史的背景に ついて

平成 26 年入学
派遣先国：パキスタン
松田 和憲

キーワード：南アジアのイスラーム文化、イスラーム聖者、聖者崇敬批判、ムジャーヒディーン運動

対象とする問題の概要

南アジアにおいてイスラームがひろまった要因の一つに、スーフィーと呼ばれる「イスラーム神秘主義者」たちの活躍があった。影響力を持ったスーフィーは民衆から聖者として崇められ、死後彼らの墓が廟となり、とりなしを求めて多くの参詣者が集まった。しかし 18 世紀になると、そのような慣習に対して批判する動きが現れた。19 世紀前半にパンジャーブを支配していたシクに対するジハード運動であるムジャーヒディーン運動の指導者、シャー・ムハンマド・イスマールはその批判の流れを受け継ぎ、廟参詣とそこで行われる慣習を大々的に批判した。この批判はイスラーム改革・復興運動の側面も有していたが、この批判に反発する勢力も現れ、大きな議論を呼んだ。そしてこの批判がもととなり、南アジアのスナ派が「分裂」した。

研究目的

パキスタンでは文献収集と聖者廟での調査を中心に行った。文献収集ではシャー・ムハンマド・イスマールの著作や彼の改革思想に賛同したデーオバンド学派やアフレ・ハディース派に関する文献、彼の聖者崇敬批判に対して反論したファズル・ハック・ハイラーバーディーの著作を手に入れることに全力を注いだ。文献収集をするにあたって、19 世紀から 20 世紀にかけてのインド・ムスリムの歴史研究で有名なムイヌッディーン・アキール博士の助言のもと収集を行った。聖者廟崇敬の調査は、カラチのアブドゥッラー・シャー・ガズィー廟を中心に行った。

フィールドワークから得られた知見

カラチではウルドゥー促進協会の図書館、カラチ大学マフムード・フサイン図書館、アキール博士が所有している数千点の文献、ラホールではイクバル・ムジャッディディー教授がパンジャーブ大学に寄贈した文庫で文献調査と収集を行った。

今回一番の収穫は、シャー・ムハンマド・イスマールの主著である『信仰の強化』の 1857 年にカルクッタで出版された版のコピーを手に入れたことである。インド大反乱が起こった 1857 年前後の文献は入手が大変難しいため、この版に巡り合えたのは大変幸運であった。またアラビア語で書かれた『説教集』、イスラーム神秘主義について書かれた『香水の拡散』など入手できた。彼の祖父であり、南アジア最大のイスラーム思想家シャー・ワリーウッラーの書簡集や彼に関する研究書も入手した。この書簡集は 2004 年にインドのラームプールで出版されたもので、インドで出版された最近の文献がパ

キスタンにも流通していることが判明した。そしてイスマーイールの伯父で彼に大きな影響を与えたシャー・アブドゥルアズィーズの有名なファトワー集をはじめ、イスマーイールを南アジアにおけるイスラーム改革の先駆けとみなしたデーオバンド派のアシュラーフ・アリー・ターナヴィーの著作、同じく彼をイスラーム改革の先駆けとみなしたアフレ・ハディース派に関する近年出版された3巻本の研究書、またイスマーイールを不信仰者として断罪したファズル・ハック・ハイラーバーディーの著作も入手することができた。

カラチのアブドゥッラー・シャー・ガズィー廟は、ラマダーン明けの祝日の時には行列ができるほど多くの人々が参詣をしていたが、祝日が終わると人の数はまばらであった。今回の訪れたときは改装工事中であったため、今後どのように変わっていくか観察していきたい。

今後の展開・反省点

今回の調査では博士予備論文に使用予定のシャー・ムハンマド・イスマーイールの著作を揃えることができた。今後の展開としてシャー・ムハンマド・イスマーイールに大きな影響を受けたデーオバンド派やアフレ・ハディース派の指導者たちの著作を見ていき、彼の改革のどのようなところに影響を受け、聖者崇敬批判を展開していったのか明らかにしていきたい。また彼に批判的なファズル・ハック・ハイラーバーディーを支持していた人々の著作を収集し、彼らが問題視した部分を分析していくことで、どのように聖者崇敬を擁護していったのかを明らかにしたい。



カラチでの文献収集—アキール博士と本屋にて—



アブドゥッラー・シャー・ガズィー廟の入り口



アブドゥッラー・シャー・ガズィー廟の改築工事の様子